

館内のサインをリニューアルしました

館内設備の場所や館内でのルールを来館者に伝えるツール、館内サイン。昨年度末からサインの見直し・デザインのリニューアルを行っています。新しくなったサインとともに、館内でのルールについて改めてご案内します。

館内サインをリニューアル！



館内の出入口に新たな看板を設置しました

出入口に設置した看板には、館内でのルールを記載しています。裏側には敷地内の地図を掲載しています。



常設展示の入口に新たな看板を設置しました

撮影のルールや音声ガイドの案内など、展示場内での楽しみ方を記載しています。



そのほかにも

展示場内の案内表示が新しくなりました

遠くからでも見やすいようにアイコンを大きくしたり、海外からの来館者に向けて英語を併記したりしました。



館内のルールについて

特に守ってほしい2つのルール

展示環境や展示物を守るため、常設展示内ではルールを設けています。



展示場内では飲食できません
(アメ・ガムを含む)



展示物・展示ケースには
触らないでください

のど飴はなめてもいいんじゃない？

ガムを噛むくらいなら大丈夫？

答えは… **NO**

どうして飲食してはいけないの？

飲食をした際、食べこぼしや飲みこぼしをしてしまうと、アリなどの害虫を呼び寄せ、展示物が傷つけられるおそれがあります。また、アメやガムを口に入れたまま、くしゃみや会話をすると、つばが飛び、虫やカビの発生につながります。虫やカビは展示物にとって大敵です。

ケースに入っていないものは触ってもいい？

答えは… **NO**

どうして触ってはいけないの？

ケースに入っていない展示物もありますが(露出展示)、貴重な資料に変わりありません。展示物を壊したり、汚したりするのを防ぐため、触らないでください。また、展示ケースが動いたり、壊れたりするのを防ぐため、見学の際は展示ケースにも触れないでください。

貴重な文化財を守るために、また来館者のみなさんが気持ちよく鑑賞できるように、ご協力をお願いします。

【作品1】白釉御判手茶碗 外壁：①丸印



①丸印「萬」

【作品2】白釉馬上杯形御判手茶碗 外壁：①丸印、見込み：②角印



①丸印「萬」

②角印「萬」

島津義弘の折り紙付き

抹茶碗は茶の湯で用いられる実用の器ですが、美術的価値を認められた名高い茶碗が数多く伝来しています。

薩摩焼の中でとりわけ著名な茶碗に「御判手茶碗」があります。島津義弘(1535-1619)が好みのものに押させたという印(判)のある茶碗です。しかしながら江戸中期には、印に記された漢字らしき文字を何と読むのか分からなくなっており、大著『薩摩焼の研究』(昭和16年)でもわずか1点しか現存作品を確認できておらず、その実態は不明でした。

最近、印のある作例を調査した結果、義弘御判手の姿が概ね明らかになりました。当館に寄託されている2種を例にご紹介します。

写真をご覧ください。外壁や見込みに丸や四角の印があるのにお気づきいただけるでしょう。これが、いわゆる義弘御判手の印で、①丸印(径約2.7cm)と②角印(縦約2.2cm)の2種があることが分かりました。丸印のみのものと、丸印と角印が押されたものがあり、釉薬のために判読しにくいのですが、いずれも篆書体の「萬」の文字です。つまり、義弘を象徴するのは「萬」印であるわけです。

ただし、よくよく見ると印の位置も向きもさまざま。【作品1】では、高台を上にして押したのでしょうか、文字はまったくの逆さま。【作品2】では外壁の丸印は斜めに押され、加えて見込みに角印が押されています。他に見込みに丸印を押した例もあります。このように位置も向きも実におおらかで、当時の気分が伝わってくるようです。そして何より、見込みや外壁にこんな大きな印を押した茶碗は他に例をみません。義弘御判手は、まさに異形の茶碗なのです。

主任学芸専門員 深港恭子(美術・工芸担当)

黎明館のフカボリ 17

黎明館で出会う

石垣に残る弾痕

御楼門周辺の石垣には、無数の凹みが見られ、中には銃弾や砲弾の破片が食い込んでいるものがあります。これらの多くは明治10(1877)年の西南戦争の際の痕跡です。

石垣に残るこれらの弾痕から、複数箇所から銃撃や砲撃が行われたことをうかがい知ることができ、当時の戦闘の凄まじさを今に伝えています。



令和6年度に開催した 企画展の図録です！



令和6年度に開催した4つの企画展をひとつの図録にまとめました。1冊650円。常設展示入口で販売しています。購入希望の方はお早めに！(令和8年3月末日まで販売予定)

年々夏の暑さが厳しくなってきました。お出かけしたいけれど、この暑さじゃ…と思っているあなた。黎明館に出かけてみてはいかがでしょうか？散歩がてら、常設展示で気軽に鹿児島島の歴史や文化に触れたあとは、レストランやカフェのひんやりメニューに舌鼓を打つのもおすすめです。(中村)

編集・デザイン 田平晶子 中村友美